

(6) 水稻除草剤の剤型の特徴と留意事項

現在市販されている水田除草剤は「1キロ粒剤」、「3キロ粒剤」、「500グラム粒剤」、「250グラム粒剤」、「顆粒水和剤」、「水和剤」、「乳剤」、「フロアブル剤」、「ジャンボ剤」などがある。比較的新しい剤型について、その特徴と使用上の注意を記載する。

1 1キロ粒剤

- 従来の3キロ粒剤に比べ3分の1の量になり、1袋あたりの濃度が高くなっているため、撒きすぎないようにする。
- 散布する場合は、散布機の吐出量の確認調整を行う。過剰吐出による無散布部分がでないように、吐出量は抑え気味に散布し、残量を修正散布するようにする。
- 機械散布にあっては、できるだけ1キロ剤対応型の動力散布機(専用アタッチを含む)を使用する。散粒機を使用する場合は調量レバーを3キロ粒剤散布時の位置よりも下げ、吐出量を減らし、均一散布できるように調量レバーの開度と歩行速度で調整する。

2 500グラム粒剤、250グラム粒剤

- 少量拡散型粒剤で軽量化されており、短辺が30m以下の圃場であれば、「周縁部散布」が可能であり、省力効果が期待でき、特別な散布機具が必要ない。しかし、初めて使用する場合は、まき過ぎないように十分注意する。
- 田面の均平が不十分で露出面があると、除草効果が劣るため、均平、湛水深を十分確保し、露出田面がない状態で散布する。
- アオミドロ等の藻が多発している場合には拡散性が劣るため使用しない。

3 フロアブル剤

- 「畦畔からの手振り散布」が可能で、原液を10a当たり300～500 m^3 を散布する。散布機具が不要で、労力面での軽減化が可能である。
- 使用前に容器をよく振る。
- 散布幅は約15mで、幅30m以下の水田では畦畔両側から水田内側に向かって散布し、それ以上の水田では中央に入って散布する。
- 田面の均平が不十分で露出面があると、除草効果が劣るため、均平や湛水深には注意する。
- 散布時の水深は深めとし、田面を露出させないようにする。散布後は落水やかけ流しをしない。また、散布後少なくとも4日程度は湛水状態を保つ。
- アオミドロ等の藻が多発している場合には拡散性が劣るので使用しない。

4 ジャンボ剤

- 粒剤を1個30～50gのポリビニールアルコールフィルムパックに詰めるか、または固形化されており、10a当たり10～20個を水田に手で投げ込む。散布機具が不要で、ドリフトが無く作業の軽減化や被曝軽減が図れる。
- 田面の均平が不十分で露出面があると、除草効果が劣るため、均平や湛水深には注意する。
- 藻が多発している場合には拡散性が劣るので使用しない。
- パック剤の場合、パックが水溶性であるため、濡れた手や降雨時に濡らさないよう取り扱いに注意する。
- 湛水深を5～6cmのやや深水状態にして水の出入りを止め、均一に投げ入れる。

5 顆粒水和剤(ドライフロアブル)

- 使用前に剤を水に溶かし、フロアブル剤と同様に「畦畔からの手振り散布」が可能である。希釈倍率及び散布量については、剤によって異なるので注意する。
- 散布用の専用の容器を用意し、容器に水を入れその後に薬剤を入れてよく振り混ぜるなど、説明書の注意に従って散布液を作る。
- 顆粒にしていることで被曝が少なく、持ち運びの軽減や容器等の梱包残処理も少なくてすむ。
- フロアブル剤と同様、田面の均平が不十分で露出面があったり藻が発生していると、除草効果が劣るため、均平や湛水深、散布時期には注意する。